

常 峠  
とうげ

河井継之助記念館  
友の会会報  
第25号  
2019.3

〈編集・発行〉  
河井継之助記念館  
新潟県長岡市長町1丁目1675-1  
〒940-0053  
Tel.0258-30-1525  
Fax.0258-30-1526  
頒布価：50円（送料別）

〈編集人〉  
荒木 法子 恩田 富太  
堀口 靖夫 水野 秀雄  
渡邊 静江 友の会事務局

〈構成・印刷〉  
高速印刷株式会社

## ここは長岡人の品格を問う場である

河井継之助記念館友の会幹事 渡辺 千雅



熟年の知識層にご挨拶すると、大抵はこうした会話から始まりま  
す。「つぎさ？やまが  
た？さつちよ？」何  
の事やらキョトン。聞  
くは一時の恥と申しま  
す。知りたい、関わり  
たい気持ちがあれば、  
後々、事情も返す言葉  
もわかって参ります。

「おめさん、どっから来なしたね？  
さゆーしゆう？ほおーくまも  
とお！細川さんのところねかや。つ  
ぎさも、やまがたが相手らつたら  
のお。」  
「ほお 天草んが？！さつちよ〜でね  
えで、何よりらこて。」  
長岡市民になって数年経った頃、

「つぎさ」が河井継  
之助の愛称であるこ  
と。小千谷会談で、中立論を唱えた  
長岡藩家老・河井との交渉を一方的  
に決裂させた新政府軍の軍監・岩村  
精一郎（土佐）。「ああ、岩村でなく、  
山縣有朋（長州）だったら、北越戊  
辰戦争は回避できたろうに……」と  
は、市井の人びとの常套句。「錦の  
御旗」を掲げ、勝ち組となった薩長

土肥に対し、「賊軍」の汚名を着せ  
られた敗者には百五十年経っても恨  
みが残る。

仮に薩長出身だろうと、村八分に  
されることはありませんが（笑）、  
自分が暮らす地域の歴史や人や文化  
を学ぶきっかけになりました。

「河井さんの末裔は？」「長岡藩の  
殿さまはどんな方？」

好奇心旺盛なよそ者が知りたい情  
報は、意外に地元の方も「知らない、  
忘れた」事柄が多く、「興味がある」  
と仰います。ならばと、二〇〇一年  
一月に月刊地域情報紙『マイスキッ  
プ』創刊号を発刊し、無料配布を始  
めました。スタッフの奉仕とサポー  
ターのご厚意で十八年間続いていま  
す。

私の担当はトップインタビュー。  
まさに「人に歴史あり」で、登場人  
物のお話は奥深く面白い。興味の枝  
葉は四方に伸び、新たな出会いへと  
つながって参ります。

河井継之助記念館の稲川明雄館長  
から小紙にご登場いただいたのは  
十六年前、二〇〇三年の九月号。当  
時、長岡市立中央図書館館長だった  
先生に「歴史の面白さは？」と質  
問すると、「小学生の頃、墓場で墓  
誌銘の戒名や享年を見るのが好き  
だった。どの戦で亡くなり、どんな  
人かと思いに耽った。歴史を学ぶの  
も同じこと。過去の人を多く知ると、

生死の境目が曖昧になってくる。人  
の生き方を知り、自分がどう生きる  
べきか、さらに、命がつながって  
いく重みがかかる。それが歴史の面白  
さではないか」と。

それから三年後、二〇〇六年十二  
月二十七日に河井継之助記念館が開  
館し、先生は館長にご就任。記念館  
は河井の生家跡に住まわれていた羽  
賀善蔵氏の私邸を市が買い取り、改  
修したもの。

小紙は開館記念版として、翌年の  
三月号トップに羽賀氏のご長男・龍  
介氏とご長女・桂子氏にご登場いた  
だき、企画面では館長から河井と羽  
賀氏にまつわる奇縁について伺いま  
した。

館長が締め、「長岡は幾度も人  
災、天災から復興を遂げたまち。そ  
の復興魂の原点である旧河井邸を記  
念館にしたのは、長岡人の精神を知  
るうえで大切なこと。ここは長岡  
人の品格を問う場である」と仰っ  
たのが、心に深く刻まれています。

渡辺千雅（わたなべちが）

プロフィール

熊本県天草市出身・新潟大学教育学部卒業  
昭和60年新潟県公立中学校美術教師を結婚退職  
昭和63年より長岡市在住  
月刊地域情報紙『マイスキップ』代表デザイナー  
長岡口ケなび会長  
「12・8慰霊の火花打上げ」実行委員会代表  
「長生橋を愛する会」理事長  
河井継之助記念館友の会幹事など